報告

神奈川県内高校生の医療福祉職の認知度、職業選択、作業療法のイメージに関する実態調査

Survey of Kanagawa Prefecture High School Students' Awareness of Medical and Welfare Job, Occupation Selection and Occupational Therapy Image

白濱　勲二[1)]*，安田　大典[2)]

１）神奈川県立保健福祉大学　リハビリテーション学科　作業療法学専攻

２）熊本保健科学大学　リハビリテーション学科　生活機能療法学専攻

Kunji Shirahama[1)]，Tomonori Yasuda[2)]

1）Kanagawa University of Human Services, School of Rehabilitation. Division of Occupational Therapy.

2）Kumamoto Health Science University, School of Rehabilitation. Division of Occupational Therapy.

抄　録

目的：神奈川県内高校生を対象に医療福祉職の認知度や職業選択の傾向を捉え、作業療法のイメージについて明らかにする。

対象：リハビリテーションと脳活動の講座を受講した神奈川県内高校生77名。

方法：医療福祉職の認知度･知名度、なりたい職業、作業療法のイメージ、職業選択の手段について、無記名アンケート調査を実施した。

分析方法：記述統計、テキストマイニング。

結果：対象は、平均年齢15.9±0.6歳（15 ～ 17）、女性56名・男性21名であった。医師、歯科医師、看護師の職名は100％認知されていたが、認知されていない職業もあった。認知度・知名度となりたい職業は､完全には一致していなかった。作業療法の対象者や内容のイメージはある程度、実際に即していた。職業選択の方法として、インターネットが最も活用され、その次に見学や体験が多かった。

考察：本研究の対象の高校生は、複数の医療福祉職を認知していたが、認知度のばらつきが大きかった。作業療法はある程度、理解されており、職業選択を検討する時期の高校生には認知が進んだと考える。さらに、職場見学や職業体験が職業選択に影響していると考えた。

キーワード：医療福祉職、認知度、職業選択、テキストマイニング、作業療法

Key words：Medical and Welfare Job, Awareness, Occupational Selection, Text Mining, Occupational Therapy

はじめに

わが国では医療分野で多くの作業療法士が活躍しており､理学療法士及び作業療法士法（1965年施行）によって国家資格として規定されている。世界中の作業療法士は増加しており、世界作業療法士連盟（WFOT）が組織され、377,928名（2011年）が世界中で活躍している。2014年には、国際学会である世界作業療法士連盟大会（16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists in collaboration with the 48th

著者連絡先：*白濱勲二
神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部リハビリテーション学科作業療法学専攻
E-mail: shirahama-k@kuhs.ac.jp

（受付　2019.7.16　／　受理　2019.11.5）

Japanese）がアジア初となる日本（神奈川県　横浜市）で開催された。WFOTの調査によると13か国の東南アジア加盟国では、76,913名の作業療法士が登録されているが、加盟国のうち約75%を日本の作業療法士が占めている。さらに、世界の作業療法士の数では、１位のアメリカに次いで、日本は第２位であり、アジアのみならず、世界での日本の作業療法士の役割は大きい（WFOT，2012）。世界第1位のアメリカでは、1917年にアメリカ作業療法士協会が設立され、現在でも、人気がある職業で、人気職業ランキングで理学療法士が20位、作業療法士が11位にランキングされており、収入も平均で$83,200（2017年）と高く、社会的に認められた職業である（U.S. News & World Report，2019）。一方、日本では、中学生を対象とした職業紹介Webサイトの人気職業ランキングでは、理学療法士は52位にランキングされているが、作業療法士は100位以内にさえランキングされておらず（13歳のハローワーク，2019）、平均年齢31.8歳、平均年収は406万円（『賃金構造基本統計調査 平成28年』厚生労働省）であり、海外と状況が全く異なっている。

現在、日本の作業療法士の数は94,241名（2019年５月１日）であり、作業療法士を養成する大学、専門学校も全国で190校（202課程）、入学定員7,660名（JAOT，2019）と急増しており、受験者数の減少、定員割れや学力の低下が危惧されている。さらに、領域問わずに少子化と大学定員の増加により、受験者数と大学入学定員が逆転する全入時代が到来したと言われている。

また、高校２年生（約5,500人）に対する福祉の仕事に対するイメージの全件調査では、「将来の進路として、福祉の仕事を希望しますか」という質問に対して、「希望していない」（42.3%）、「あまり希望していない」（36.2%）と否定的な回答をした高校生がほぼ8割を占めており、現実的に進路を考える時期では、福祉職への就職を希望していない事が示唆された（石川，大和，胡，2018）。しかし、この調査では、具体的な職名を挙げて、質問していないため、回答する高校生のイメージが確実に形成できていない可能性があり、隣接する医療福祉職についても統合して調査する必要があると考えた。また、高校生の職業選択において、医療福祉職の中でも、特に、作業療法（士）という職業イメージが明確に確立されていない事も推察された。

したがって、本研究の目的は、神奈川県内高校生を対象に医療福祉職の認知度や職業選択の傾向を捉え、さらに、作業療法のイメージについて明らかにすることである。その結果を踏まえて、一般市民や高校生等が医療福祉職への関心を高めるための効果的な啓蒙活動を模索する。

研究方法

１．対象

対象は、神奈川県高大連携プログラムから　講座「リハビリテーションと脳活動」（以下、講座）を選択して参加した神奈川県内の県立高校２校の高校生77名であった。

２．アンケートの作成と実施

職業分類表（第４回改訂　厚生労働省編職業分類表）（厚生労働省，2011）から26種の医療福祉職の認知度について、名前を知っている、内容を知っている、実際に見たことがある、の３段階で選択させた。知名度は26種の医療福祉職の中から、上位5位を選択させた。将来の職業として希望する職業は選択肢に限らず、自記式で上位３位を回答させた。

作業療法士の認知は、知らない、内容を知っている、実際に見たことがある、の３段階で選択させた。作業療法のイメージは、名称、働いている場所、作業療法の対象者、作業療法の内容について、自由記述式で回答させた。進路・職業選択に関するツールを選択式と自由記述で回答させた（表１）。アンケートは、氏名、住所などの個人を特定できる情報を全く含まない、無記名とした。

講座の前に、事前配布したアンケート用紙等を用いて研究の説明を行い、不明な点がないか質問時間を設けた。講座終了後、アンケートを記入してもらい教室に設置した、回収箱へ提出させた。

３．分析方法

各職業の認知度や知名度、希望する職業、職業選択の手段について、選択回答、または、自由記述による回答を得て、記述統計を行った。作業療法の認

表１　医療福祉職に関するアンケート

問1　以下の選択肢の職業の中であなたが名前を知っている職業・内容を知っている職業・見たことがある職業の番号に〇をしてください（複数回答可）

1）　名前を知っている：

2）　内容を知っている：

3）　実際に見たことがある：

問2　以下の選択肢の職業の中で知名度が高い（名前や仕事内容が知られていると思う）職業を高い順から5つ挙げてください

第1位：　　第2位：　　第3位：

第4位：　　第5位：

選択肢

1医師、2歯科医師、3保健師、4助産師、5看護師、6診療放射線技師、7臨床検査技師、8理学療法士、9作業療法士、10視能訓練士、11臨床工学技士、12義肢装具士、13歯科衛生士、14救急救命士、15あん摩マッサージ指圧師、16はり・きゅう師、17柔道整復師、18言語聴覚士、19薬剤師、20管理栄養士、21保育士、22社会福祉士、23介護福祉士、24精神保健福祉士、25ホームヘルパー、26ケアマネージャー

問3　あなたがなりたい職業を3つ挙げてください（選択肢の職業以外でもOK）

1　　2　　3

問4　作業療法士という職業を知っていますか？

1)知らない　　2）内容を知っている　　3）実際に見たことがある

問5　作業療法（作業療法士）についてのイメージを教えてください（自由記述）

1）名前のイメージ　2）働いている場所　3）対象者のイメージ　4）内容のイメージ

問6　大学選び、職業選びで利用するツール、手段はなんですか？

1）インターネット、2）高校の先生、3）塾、4）親からの情報、5）友人からの情報、6）書籍、本、雑誌、7）新聞、8）見学や体験、9）兄弟（姉妹）からの情報、10）その他（　　）

知度やイメージなどについて、KH Coderを用いて、テキストマイニングによる頻出語のカウント、同じ文章中に出現する頻度を示すために階層的クラスター分析をおこなった（樋口，2017）。

４．倫理的配慮

倫理的配慮として、講座を希望した高等学校の校長および科目担当教員に対して、研究計画書、対象者への説明書、研究の依頼書と承諾書、アンケート用紙を郵送し、学校長の署名による同意が得られた高校にて実施した。講座の開催日の１週間以上前に前述した書類一式を科目担当の高校教員あてに郵送し、高校教員から講座参加予定者に配布してもらった。対象者には事前にアンケート内容を確認してもらうことで、十分な検討時間を確保した。

講座前に研究代表者が、配布済みの書類を使用して、研究の内容と対象者の負担、研究への参加は自由意志である事、学業成績には関係ないことを説明した。講座後、再度、参加は任意である事、参加を希望しない学生は退室してよいことを伝えて、参加を希望する場合はアンケートに回答してもらった。アンケート提出用の回収箱への提出をもって、参加に同意したと判断した。本研究は神奈川県立保健福祉大学研究倫理審査委員会の承認（通知番号25-015）を得て実施した。本研究における利益相反（COI）はない。

結果

１．対象者の特性

アンケート回収数は77部（回収率100%）であった。対象者の性別は、女性56名・男性21名、平均年齢15.9±0.6（15～17）歳、学年は１年生57名、２年生20名であった。

２．医療福祉職の認知度（表２）

１）名前を知っている

名前の認知は、医師、歯科医師、看護師は対象者全員（77名、100%）に認知されていた。助産師、理学療法士、歯科衛生士、救急救命士、薬剤師、管理栄養士、保育士、介護福祉士、ホームヘルパーは80%を超えていた。精神保健福祉士が（８名、10.4%）最も低くかった。その他、本学に関連する職種では、保健師（53名、68.8%）、作業療法士（49名、63.6%）、社会福祉士（56名、72.7%）などは、ある程度、職名が認知されていた。

２）内容を知っている

内容の認知は、医師、歯科医師、看護師、薬剤師、保育士、ホームヘルパーは80%を超えていた。視能訓練士、臨床工学技士、義肢装具士、柔道整復師、精神保健福祉士は10%未満と低かった。その他、本学に関連する職種としては、保健師（16名、20.8%）、助産師（58名、75.3%）、理学療法士（22名、28.6%）、作業療法士（17名、22.1%）、管理栄養士（44名、57.1%）、社会福祉士（８名、10.4%）、介護福祉士（36名、46.8%）であった。

３）実際に見たことがある

実際の仕事を見たことがあるのは、医師、歯科医師、看護師は80%を超えていた。臨床工学技士、精神保健福祉士は1名のみであった。その他、本学に関連する職種では、保健師（13名、16.9%）、助産師（18名、23.4%）、理学療法士（13名、16.9%）、作業療法士（７名、9.1%）、管理栄養士（23名、29.9%）、社会福祉士（３名、3.9%）、介護福祉士（30名、39.0%）であった。

３．医療福祉職の知名度（表３）

知名度ベスト５として、複数回答を求めた。１名を除いた76名が医師（76名、98.7%）を選択しており、特に、第１位として選択した者が多かった。上位に選択されたのは、看護師（67名、87.0%）、歯科医師（50名、64.9%）、保育士（40名、51.9%）、薬剤師（30名、38.9 %）、ホームヘルパー（21名、27.2%）の順であった。助産師、救急救命士、介護福祉士も一定の知名度があると認識されていた。その他、本学に関連する職種では、保健師（４名、5.2%）、理学療法士（２名、2.6%）、作業療法士（２名、2.6%）、管理栄養士（４名、5.2%）、社会福祉士（１名、1.3%）の知名度は低いと認識されていた。一方、１名も選択されなかった職種が11職種（11/26職種、42.3%）と多数みられた。

４．なりたい職業（表４）

医療福祉職だけでなく、すべての職業から、なりたい職業ベスト３として、自由記述で複数回答を求めたところ、最も多く選択されたのは看護師（25名、32.5%）であり、第１位に選択した者（19名、

表２　職業の認知度

	問1-1名前を知っている		問1-2内容を知っている		問1-3 実際に見たことがある	
	N＝77	%	N＝77	%	N＝77	%
1医師	77	100.0	73	94.8	71	92.2
2歯科医師	77	100.0	66	85.7	62	80.5
3保健師	53	68.8	16	20.8	13	16.9
4助産師	74	96.1	58	75.3	18	23.4
5看護師	77	100.0	71	92.2	68	88.3
6診療放射線技師	37	48.1	23	29.9	16	20.8
7臨床検査技師	39	50.6	15	19.5	6	7.8
8理学療法士	62	80.5	22	28.6	13	16.9
9作業療法士	49	63.6	17	22.1	7	9.1
10視能訓練士	10	13.0	3	3.9	3	3.9
11臨床工学技士	13	16.9	2	2.6	1	1.3
12義肢装具士	13	16.9	6	7.8	3	3.9
13歯科衛生士	70	90.9	31	40.3	32	41.6
14救急救命士	72	93.5	46	59.7	28	36.4
15あん摩マッサージ指圧師	18	23.4	9	11.7	3	3.9
16はり・きゅう師	58	75.3	32	41.6	6	7.8
17柔道整復師	19	24.7	5	6.5	6	7.8
18言語聴覚士	30	39.0	11	14.3	4	5.2
19薬剤師	76	98.7	67	87.0	50	64.9
20管理栄養士	71	92.2	44	57.1	23	29.9
21保育士	76	98.7	67	87.0	60	77.9
22社会福祉士	56	72.7	8	10.4	3	3.9
23介護福祉士	70	90.9	36	46.8	30	39.0
24精神保健福祉士	8	10.4	2	2.6	1	1.3
25ホームヘルパー	75	97.4	62	80.5	36	46.8
26ケアマネージャー	47	61.0	19	24.7	19	24.7

24.7%）も多数みられた。看護師に次いで､医師（19名、24.7%）、保育士（18名、23.4%）が上位３つを占めており、第１位に選択していたのも同じ順位であった。その他、本学に関連する職種では、理学療法士（13名、16.9%）、作業療法士（９名、11.7%）、介護福祉士（６名、7.8%）、助産師（６名、7.8%）、管理栄養士（４名、5.2%）、保健師、社会福祉士（２名、2.6%）の順に選択された。

医療福祉職以外の職種では、パティシエ、教諭、建築士、公務員、幼稚園教諭、トリマー、経営者、獣医、編集者、弁護士などに複数回答があった。また、１名が選択した職種が多数あった。

５．作業療法のイメージ

１）認知度

作業療法の認知度について段階的に複数回答を求めた。46.8%にあたる36名が作業療法士という職業を「知らない」と回答した。「内容を知っている」のは９名（11.7%）、「見たことがある」のは６名（7.8%）と低値を示した。

２）作業療法のイメージ（回答57件）

作業療法の名称に対するイメージの頻出語を示す。名詞では「リハビリ」（22件）が多く、サ変名詞では「作業」（４件）､形容動詞では「大変」（４件）、動詞では「手伝う」（７件）、動詞Bでは「する」（16件）、名詞C「人」（11件）などがあげられた。否定助動詞の「ない」（９件）では、「イメージがない」、

表３　知名度ベスト５（N=77）

	合計	第1位	第2位	第3位	第4位	第5位
医師	76	63	8	5	0	0
看護師	67	6	41	13	4	3
歯科医師	50	1	11	21	13	4
保育士	40	4	9	15	8	4
薬剤師	30	0	1	2	12	15
ホームヘルパー	21	0	0	1	6	14
助産師	11	0	1	0	5	5
救急救命士	11	1	0	2	5	3
介護福祉士	10	0	0	2	5	3
歯科衛生士	5	0	0	1	2	2
保健師	4	0	0	0	1	3
管理栄養士	4	0	0	0	1	3
理学療法士	2	1	0	0	0	1
作業療法士	2	0	1	0	1	0
社会福祉士	1	0	0	0	0	1
診療放射線技師、臨床検査技師、視能訓練士、臨床工学技士、義肢装具士、あん摩マッサージ指圧師、はり・きゅう師、柔道整復師、言語聴覚士、精神保健福祉士、ケアマネージャー	0	0	0	0	0	0

「イメージがわかない」、「命に直接かかわらない」、「上手く動けない人をリハビリして、動けるようにする」、「細かい作業ができない人の手先などのリハビリ」、「わからない」などに用いられていた。

３）対象のイメージ（回答61件）

作業療法の対象のイメージの頻出語を示す。名詞では、「障害」（９件）、「リハビリ」（８件）、「ケガ」（５件）、「事故」（４件）、「高齢」（３件）、「手足」（３件）、「身体」（３件）、「年寄り」（３件）、サ変名詞では「病気」（５件）、「生活」（３件）、「手術」（２件）、形容動詞では「不自由」（14件）、動詞では「動く」（５件）、「持つ」（４件）、名詞Cでは「人」（47件）、「体」（11件）などがあげられた。否定助動詞の「ない」（６件）では、「ケガや病気で自分の思い通りに動けない人」、「事故で体がまだ動かせない人」、「事故などで体が上手く動かなくなった人」、「手足などが上手く動かない人」、「指が動かない人」などに用いられていた。その他、否定文ではないが、対象を表現する「～人」では、「リハビリが必要な人」、「病気の人」、「病気で脳や手先に障害が残ってしまった人」、「認知症の人」、「手足が不自由な人」、「日常生活が不自由な人」、「日常生活に負担がある人」、「身体障害を持っている人」、「手術後でリハビリが必要な人」、「細かい作業や手先を使うことが難しい人」などがあげられた。

表４　なりたい職業ベスト３（N=77）

	合計	第1位	第2位	第3位	その他（自由記述）	合計
看護師	25	19	4	2		
医師	19	12	4	3	パティシエ、教諭、	
保育士	18	9	6	3	建築士、公務員、	3
理学療法士	13	4	3	6	幼稚園教諭、トリマー	
作業療法士	9	3	4	2		
救急救命士	8	1	5	2		
介護福祉士	6	2	3	1	経営者（カフェ、社長）、獣医、	2
助産師	6	1	3	2	編集者、弁護士	
ホームヘルパー	5	1	2	2		
ケアマネージャー	4	0	2	2		
管理栄養士	4	1	1	2	アパレル関係、居酒屋、	
診療放射線技師	4	1	0	3	エステティシャン、キャビンアテンダント、	
保健師	4	0	1	3	サッカー選手、シェフ、	
柔道整復師	3	1	0	2	スタイリスト、スポーツ関係の仕事、	
臨床検査技師	3	1	1	1	スポーツコーチ、スポーツトレーナー、	
あん摩マッサージ指圧師	2	0	1	1	ダイバー、デザイナー、	
社会福祉士	2	0	2	0	パイロット、ペットショップ、	
薬剤師	2	0	1	1	ホテルマン、ミュージシャン、	1
言語聴覚士	1	0	0	1	園芸、歌手、警察官、警備員、	
視能訓練士	1	0	0	1	塾講師、書店員、	
歯科医師	1	0	1	0	心理カウンセラー、人と関わる仕事、	
歯科衛生士	1	0	0	1	専門学校の先生、体育教師、	
臨床工学技士	1	1	0	0	大臣、通訳、	
はり・きゅう師	0	0	0	0	動物飼育員、美容師、	
義肢装具士	0	0	0	0	養護教諭、旅行業者	
精神保健福祉士	0	0	0	0		

４）働いている場所（回答68件）

作業療法士が働いている場所イメージの頻出語を示す。名詞では、「病院」(46件)、「リハビリ」（４件）、「研究所」（４件）、「福祉」（３件）、「デイサービス」（１件）、サ変名詞では、「施設」（５件）、「介護」（２件）などがあげられた。否定助動詞の「ない」（１件）では、「わからない」だけだった。

５）内容のイメージ（回答47件）

作業療法の内容のイメージの頻出語を示す。名詞では、「リハビリ」(21件)、「指先」（２件）、「手先」（２件）、「日常」（２件）、サ変名詞では、「作業」（６件）、「生活」（４件）、「サポート」（３件）、「運動」（３件）、「病気」（３件）、動詞では、「手伝う」（５件）、「使う」（３件）、「治す」（２件）、「助ける」（２件）、名詞Cでは、「人」（６件）、否定助動詞の「ない」（４件）では、「知らない」（２件）、「手が無い人の義手のリハビリ」、「わからない」などに使用されていた。頻出語を用いた文章では、「患者のリハビリを手伝う」、「作業を通してリハビリをする」、「仕事ができるようにリハビリさせる」、「リハビリのサポート」、「それぞれに合った運動や体操」、「指先の運動」などであった。

６）階層的クラスター分析

①作業療法の名称に対するイメージ（図１）

クラスター１として「研究」、「病気」、「使う」、「治す」、クラスター２として「医療」、「患者」、クラスター３として「助ける」、「物」、クラスター４として「イメージ」、「介護」、「リハビリ」、「手伝う」、「動ける」、「大変」、「人」、「難しい」、「作業」、「作る」で生成されていた。

②作業療法の対象者のイメージ（図２）

クラスター１として、「手術」、「リハビリ」、「必要」、クラスター２として、「人」、「不自由」、「体」、「手足」、

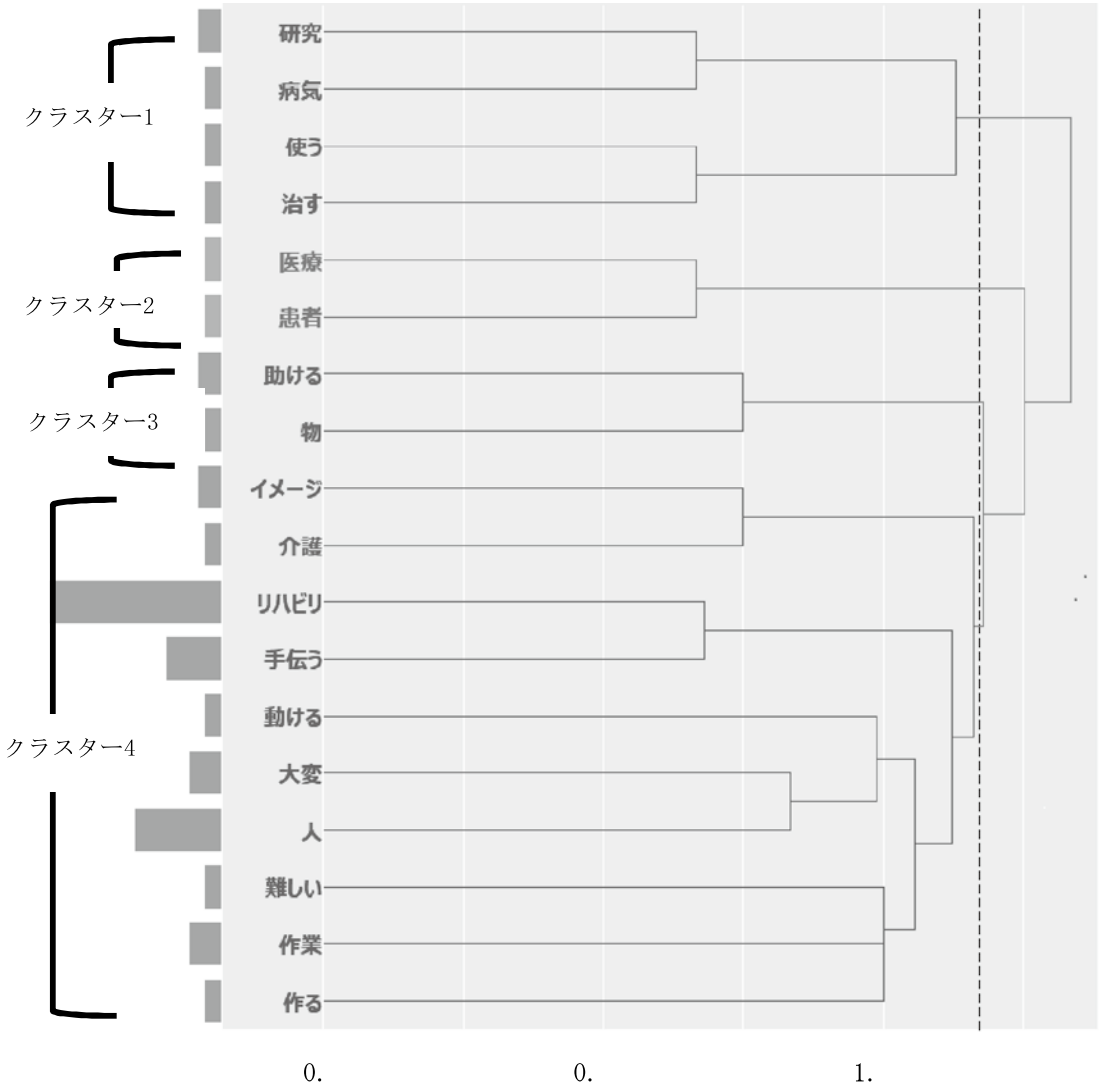

図１　作業療法の名称に対するイメージ　階層的クラスター分析

「事故」、「動く」、「上手い」、クラスター３として、「日常」、「生活」、クラスター４として、「手」、「患者」、「高齢」、「年寄り」、「手先」、「脳」、「ケガ」、「病気」で生成されていた。

６．大学選び、職業選びで利用するツール、手段について

高校生が大学や職業を選択する際に情報源や影響を受けているものについて、調査したところ、インターネット　55件、高校の先生　34件、塾　19件、親からの情報　31件、友人からの情報　14件、書籍・本・雑誌　17件、新聞　２件、見学や体験　41件、兄弟（姉妹）からの情報　15件、その他　１件であった。

考察

１．医療福祉職の認知度、知名度、なりたい職業

自分が知っている職業の「認知度」では、医師、歯科医師、看護師が高いことは予想されたが、理学療法士、歯科衛生士、救急救命士、薬剤師、管理栄養士、保育士、介護福祉士、ホームヘルパーも多くの高校生から職名を認知されていた。また、一般的に知られている職業の「知名度」では、医師、看護師、歯科医師につづいて、保育士、薬剤師、ホームヘルパーが選択されていた。この理由として、高校生自身や家族・親族が治療・看護や保育を受けたことがある職名を選択したと考える。これは、内容を知っている、実際に見たことがある、の調査結果で

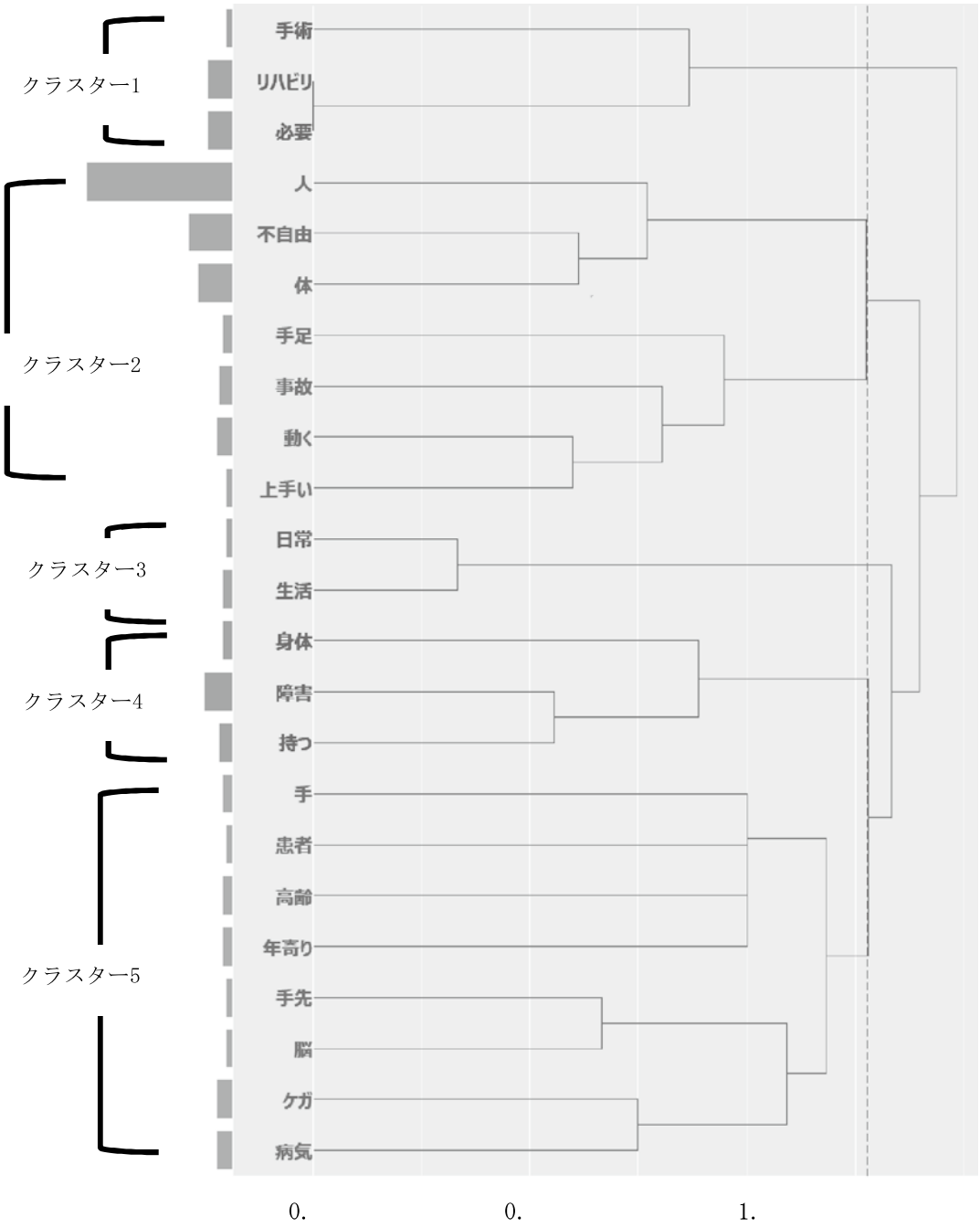

図２　作業療法の対象者のイメージ　階層的クラスター分析

も同様の結果であった。しかし、将来の職業選択の候補としての「なりたい職業」では看護師、医師、保育士の順に選択されていた。このように、「認知度」と「知名度」と「なりたい職業」は完全に一致していないが、看護師、医師、保育士は、共通して選択されており、これらの職業は知名度があり、なりたい職業の選択肢の１つとして、認知していたと考える。一方、歯科医師や薬剤師は「認知度」、「知名度ともに高いが、「なりたい職業」では、低位であり、職業選択の候補になりにくいと考えられた。

大学選び・職業選びに関する調査では、インターネットが最も多く選択されていた。対象の高校生はインターネットやSNSが普及した後に中学・高校時代を迎えており、大学や職業選択を考えるときに、まず、第１手段として、インターネットなどでの検索を行うことが想定される事から、多くの職名が認

知されていたと考える。しかし、インターネットに次いで見学や体験が多く、なりたい職業の第１位に看護師が選ばれたことからも、インターネットを情報源としているが、「看護体験」などの見学や体験を伴なうことで、自分自身の職業選択の候補になっていると考えた。したがって、インターネット等による職名や職業の広報・啓蒙活動だけでなく、いかに「見学・体験」にまで結びつけることが重要であり、職業選択に影響を与える可能性があると考えた。

職業レディネス調査（労働政策研究・研修機構，2007）では、中･高校生の職業興味（やりたい職業）を男女別に調査して、Hollandの職業興味の６領域に分類している。高校生の職業興味は、男子は上位に「機械組立工」、「建築大工」、「自動車整備工」などの、現実的興味領域（Realistic）の職業が多く、女子では上位に「保育士」、「ホテルフロント係」、「児童相談員」、などの社会的興味領域（Social）と、「服飾デザイナー」、「インテリアデザイナー」、「商業カメラマン」の音楽、美術、文芸などの芸術的興味領域での仕事や活動を好む芸術的興味領域（Artistic）の職業が多かった。

一方、定まった方式や規則に従って行動するような仕事や活動を好む習慣的興味領域（Conventional）の「行政書士」、「一般事務員」などは少なく、男子では最も少なかった。

本研究で選択肢とした26種の医療福祉職は、社会的興味領域に該当し、本研究の対象者は56/77名が女子であり、多数の高校生が社会的興味領域の職業をなりたい職業として選択していることから、職業レディネス調査の女子の結果と一致している。しかし、本研究では21名の男子学生が含まれており、職業レディネス調査の男子の結果にあるような「機械組立工」、「建築大工」、「自動車整備工」などの現実的興味領域は、上位に選択されなかった。この理由としては、神奈川県高大連携プログラムの講座から「リハビリテーションと脳活動」を選択して、参加した高校生を対象としたため、女子だけでなく、男子も医療福祉職に興味があり、職業レディネス、つまり、「個人の根底にあって、将来の職業選択に影響を与える心理的な構え」が備わっており、本研究の限界と考える。したがって、高校生の８割が福祉職への就職を希望していなかった先行研究（石川ら，2018）とも、異なった結果が得られたと考える。

２．作業療法について

本研究の結果から、作業療法士という職業は、半数が認知されておらず、名称からも「イメージがない・わかない」、「わからない」などの回答があり、従来からの問題である名称が伝わりづらくしていた。しかし、対象や働いている場所、内容については、頻出語と階層的クラスター分析の結果から、「リハビリが必要な人」、「手足･日常生活が不自由な人」に対して、「病院」などで、「患者のリハビリを手伝う」、「作業を通して、リハビリをする」、「それぞれに合った運動や体操」を実施するとの回答があった。これは、十分ではないが、作業療法に対して、一定の理解がある事を示していると考える。

作業療法の認知度に関する先行研究は、作業療法の啓蒙活動や大学生を対象とした作業療法の認知度に関する報告が散見する。作業療法士の数が現在の15％程度であった90年代の報告では、一般市民を対象に「22項目の医療・福祉職の中から名前を知る者を選択する質問」の回答で、医師、看護師、薬剤師、栄養士、助産師、保健師、ヘルパーは90 ～ 100％であったのに対し、作業療法士は48％に過ぎなかった。町内会、老人会、各種団体などを対象とした調査では、作業療法士という職種を知っている57％、知らなかった40％と回答している（山本，阿部，宮本，長谷川，佐々木 他，2012）。作業療法の啓発活動のイベントの参加者への調査では、作業療法という職業をどの程度知っていますか？という質問に対して、仕事の内容を知っている32.2％、名前は知っていた29.6％、見たことがある13.9％と回答した（高橋，児玉，宮田，2006）。一般大学生を対象とした調査では、作業療法士の名称に認知度は62.7％と他の先行研究よりも、高い認知度を示したが、介護福祉士、看護師、理学療法士、社会福祉士、鍼灸師よりも認知度が低かったと報告している（加賀山，堀田，2013）。先行研究の結果から考察すると、2010年以降の調査では、それ以前と比較して、認知度が向上してはいる。しかし、より一層作業療法士の人数が大幅に増加している現在においても十分な理解が得られているとはいいがたい。

今後は、高校生の職業教育からではなく、小・中

学生からの体験学習や作業療法をわかりやすく広報することで、国民の福祉の向上に寄与しなければならないと考えた。

引用文献

樋口耕一．(2014)．*社会調査のための計量テキスト分析―内容分析の継承と発展を目指して*，京都，ナカニシヤ出版.

石川久展，大和三重，胡 宝奇．(2018)．高校生の福祉の仕事に対するイメージや就職意識の実態 兵庫県の高校生に対する実態調査の結果をもとに．*Human Welfare，10(1),* 57-65.

13歳のハローワーク（2019）．*人気職業ランキング（2019年６月１～６月31日）*．2019年７月９日，13歳のハローワーク：https://www.13hw.com/jobapps/ranking.html

加賀山俊平，堀田和司．(2013)．作業療法の認知度に関する検討．*日本作業療法学会抄録集*，pp602.

厚生労働省（2011）．*第４回改訂 厚生労働省編職業分類 職業分類表 改訂の経緯とその内容*．2019年７月９日，独立行政法人　労働政策研究・研修機構：https://www.jil.go.jp/institute/seika/shokugyo/index.html

厚生労働省（2017-02-22），*平成28年　賃金構造基本統計調査*，2019年７月９日，e-Stat政府統計の総合窓口，https://www.e-stat.go.jp/

日本作業療法士協会（2019）．2019年５月１日現在の作業療法士，2018年度の養成校数等，*日本作業療法士協会誌*，2019年６月号，pp.40.

労働政策研究・研修機構．(2007)．中学生，高校生の職業レディネスの発達―職業レディネス・テストの標準化調査の分析を通して―．*労働政策研究報告書，No.87, 2007.* 2019 ６月７日，独立行政法人　労働政策研究・研修機構：https://www.jil.go.jp/institute/reports/2007/087.html

高橋恵一，児玉ひとみ，宮田信悦．(2006)．作業療法に対する期待とニーズ－公開事業におけるアンケート結果から－.*秋田大学医学部保健学科紀要，14（2）*，79-86.

U.S. News & World Report (2019). *The 100 Best Jobs. 2019.* Retrieved July 12, 2019 from web site: https://money.usnews.com/careers/best-jobs/rankings/ the -100-best-jobs

WFOT（2012）．*HUMAN RESOURCES PROJECT 2012.* Retrieved July 9, 2019 from WFOT web site: http://www.wfot.org/

山本和洋，阿部正之，宮本英嗣，長谷川万希子，佐々木裕希，寺嶋正啓．(2012)．北海道作業療法士会　十勝支部における講師派遣事業の取組み．*北海道作業療法，29(1),* 33-38.